



# ベトナムの歴史地区古都ホイアンの保存に関する研究：文化遺産保存を目的とした日本の国際協力事例を通して

著者	飛田 ちづる
発行年	2013
その他のタイトル	Conservation study on “Hoi An Ancient Town” historic area in Vietnam : Case study of cultural heritage conservation by Japan international cooperation
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2013
報告番号	12102甲第6733号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00122073">http://hdl.handle.net/2241/00122073</a>

氏名（本籍）	飛田ちづる（東京都）
学位の種類	博士（世界遺産学）
学位記番号	博甲第 6733 号
学位授与年月	平成 25 年 11 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	ベトナムの歴史地区古都ホイアンの保存に関する研究 －文化遺産保存を目的とした日本の国際協力事例を通して－ Conservation study on “Hoi An Ancient Town” historic area in Vietnam －Case study of cultural heritage conservation by Japan international cooperation－
主査	筑波大学教授 博士（デザイン学） 上北 恭史
副査	筑波大学教授 工学博士 稲葉 信子
副査	筑波大学准教授 博士（農学） 伊藤 弘
副査	京都女子大学教授 工学博士 斎藤 英俊

## 論文の内容の要旨

### （目的）

本論文は、ベトナムの世界遺産古都ホイアンの歴史地区整備事業を対象に、保存組織や条例の整備に関わる保存体制の構築と地区に残る歴史的建造物の保存修理方法の分析を通して、ホイアンの保存整備事業の特徴と課題、及び日本の国際協力の役割について明らかにする研究である。

### （対象と方法）

ベトナム中部のカンナム省に位置するホイアンは、チュボン川下流に位置する古い港町である。16 世紀にヨーロッパや中国、日本と交流を始め、中国人街、日本人街が形成されるなど、国際貿易港として繁栄した。街路接道連棟形式の伝統的木造家屋が建ち並ぶ町並みは、ベトナム戦争で破壊されずに残り、1984 年にベトナム政府によって文化遺産として保護されることになった。その後、ベトナム政府はホイアンの保存に対して 1990 年に日本政府に保存協力を求めた。日本は建造物保存に関わる行政担当者や大学、研究所の研究者、援助機関の専門家を派遣し、ホイアンの歴史地区保存のための技術協力を実施した。その後、ホイアンは保存体制を整え、さらに歴史的建造物の修理などの保存整備を実施し、1999 年に世界文化遺産に登録された。

本研究は、ホイアンの保存整備事業を対象に、保存に必要な法整備、保存事務所等の専門組織の配置、保存調査等のドキュメンテーションの作成、保存に必要な技術の確立、保存実務に携わる人材育成、を分析の視点として、保存整備事業の特徴と日本による保存協力の実態を整理している。さらに技術協力として伝えられた木造建造物の修理技術の定着状況について保存修理事例を通して確認し、ホイアンで行われている保存修理技術の特徴について把握した。保存事務所に残る資料

に記載された歴史的建造物の修理履歴について、歴史的建造物の等級、所有者、修理費用負担者、立地場所などを分析し、修理の現状をまとめた。

また本研究は、ベトナムで行われた歴史地区の保存協力事例の比較のために、日本によって 2003 年から保存協力が行われているハノイ近郊のドゥオン・ラム村を対象事例とし、ホイアンと同様の研究手法でドゥオン・ラムの保存整備事業の分析を行っている。

本論文の構成は、第 1 章で本研究の位置づけと意義を明らかにするとともに、文化遺産の保護に関する国際憲章や専門家会議の報告から歴史地区の保存体制構築に必要な視点を整理し、研究手法の枠組みを提示している。第 2 章でホイアンの歴史地区の保存事業を整理し、日本の国際協力活動との関連を概括し、第 3 章で、ホイアンの保存整備事業について、保存に必要な法整備、保存事務所等の専門組織の配置、保存調査等のドキュメンテーションの作成、保存に必要な技術の確立、保存実務に携わる人材育成、の視点から明らかにし、保存整備事業の具体的な状況と特徴について述べている。第 4 章で、ホイアンの保存地区の歴史的建造物 168 件の修理事例を分析し、等級、所有者、修理費用負担者、立地場所などの歴史的建造物の諸要素から、等級別、立地の差異による修理事業の特徴を明らかにした。第 5 章で、ドゥオン・ラム村の保存整備事業を分析し、ホイアンの保存整備事業と比較することで、ベトナムにおける歴史地区の保存整備事業手法の定着について評価し、ドゥオン・ラム村の保存整備事業の問題点を抽出している。

#### (結果)

ベトナム戦争の終結により 1976 年に南北統一されたベトナムは、様々な遺産の文化遺産保存を進めていった。歴史地区は多くの歴史的建造物を保存し、そこに居住する住民や関係者の協力によって保存事業を進めていく必要があるため、地方自治体による保存条例や保存のための規則など複雑な保存体制を必要とする。保存体制を構築を試みていたベトナム政府は、木造建造物の修理および歴史地区保存の体制を確立している日本にホイアンの保存協力を依頼した。

本研究は、様々な専門領域の日本人専門家がホイアンの保存協力に関わり、学術調査から修理技術ワークショップ、保存行政担当者の日本招聘などの多くの交流のもとに、ホイアンの保存協力が行われていった過程を整理している。

ホイアンは徐々に歴史地区の保存体制を整え、木造建造物の保存修理技術の水準をあげ、文化遺産にふさわしい保存を行なうようになった。ホイアンは、将来的に文化遺産として適切に保存されていくと判断された結果、1999 年に世界遺産に登録された。

しかしホイアンの歴史地区の保存体制は、協力を行った日本の文化遺産保存制度と同じような形式にはならず、ホイアン独自の保存手法を形成した。その顕著な部分は、地区内に残る歴史的建造物と非歴史的建造物（新築を含む）すべてを 5 等級に分け、それぞれに修理基準を定めたことである。特に歴史的部分を残していない等級にあたる建造物の改修のために意匠見本を作成し、それらの建造物の改修や新築にあたっては意匠見本に従うように誘導している。

本論文の第 4 章で、ホイアン歴史地区の保存修理事物 196 件について分析を行い、次のような結論を導き出している。まず、日本の重要文化財にあたるような等級の高い建造物（特級、等級 1）は、綿密な保存調査のもとに古い材料を残す修理技法を採用し、日本と同じように木造建造物の価値を失わないように配慮して修理が行われていることを明らかにした。そして非歴史的建造物が該当する等級 4、5 の建造物の改修事例を分析し、観光客が多く通る表道りと裏路地に位置する建造

物で異なった手法により改修されていることを明らかにした。表通りに面する非歴史的建造物に外観と内部を伝統的意匠によって新築されたり改修されたりする事例が見られ、裏路地に位置する非歴史的建造物は、意匠見本に従って改修される傾向にあることを把握した。これによると表通りの建造物は観光を意識した改修が行われていることが考えられる。特に外観、内観とも伝統的意匠でまとめられた非歴史的建造物は、時間を経ると歴史的建造物と見分けることが難しく、保存地区の歴史的景観に影響をもたらすことが想定される。

また比較対象地として分析を進めたドゥオン・ラム村は、保存担当の部局も設置され、保存条例も策定されている。しかし保存対象建造物およびその等級が公表されていないために、文化遺産の修理に適していない修理が実施されている歴史的建造物の事例が確認された。ホイアンは世界遺産申請のために保存地区内の建造物の等級を公表し、修理ためのガイドラインも公表されているが、ドゥオン・ラム村では住民に十分な情報が提供されていないことが、適切な保存修理を実施できない理由であると考察された。

### (考察)

本研究は、国際協力によってベトナムのホイアン歴史都市の文化遺産として整備されていく状況を整理し、その特徴についてまとめた研究である。歴史的価値を文化遺産として保存する業務は数多く行われているが、これらの業務実績の整理、分析をおこなう遺産整備研究の蓄積はそれほど多くない。遺産に対する保存措置が適切であったか、という評価は、別の保存手法と比較することが難しいために一般的にあまり研究されていない。ホイアンを文化遺産として評価するために、木造建造物を主体にした保存地区をもつ日本の保存事例を基準に、さらにホイアンの保存手法を継承していると思われるドゥオン・ラム村の保存事例を参考にして、ホイアンを位置づける必要があった。文化と地域の差異を考慮しても、ホイアンは世界遺産としてある程度適切に保存体制が構築されているといえる。しかし、歴史的環境にふさわしいように整えられる非歴史的建造物の整備事例を細かく見ていくと、現在のホイアンが抱えている問題点が見えてくる。歴史地区の保存のための法制度や各種規則は、これまで歴史地区の保存体制を確立してきた各国の事例を参考にすれば構築できる。しかし文化遺産として歴史都市が抱える問題に対処し、生きている遺産として将来どのように保存していくか、というビジョンを考えるためには、行政による保存方針だけではなく、そこに住む人々による意見を反映させていく必要がある。これは今後ホイアンの社会主義政府が取り組まなければならない課題であり、住民協力による歴史都市の保存を行ってきた日本による国際協力に貢献できる点でもある。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

ベトナムのホイアンの保存協力にこれまで多くの日本人専門家が関わってきたが、研究論文はほとんど発表されてこなかった。本研究は、これまで日本が関わってきた国際協力の概要を整理し、ホイアンの保存整備事業の確立について示した点において貴重な研究であるといえる。しかしながら日本の文化遺産保存の研究者からみれば、ホイアンの保存整備体制のあり方は特別なものではなく、歴史都市の保存にとって必要な遺産整備が行われていることを確認する結果となった。この先

進国では当たり前になっている遺産整備体制の構築は、発展国の歴史都市の保存にとってハードルが高い事業であることを、外国の保存協力に携わっている研究者ならば周知している。日本が国際協力を行ってきた文化遺産保存の事例としてホイアンは貴重な成功事例であり、その概要をまとめた研究として本論文は有意義である。

本研究は、ドゥオン・ラム村の保存事例の分析を通して、保存に関する情報の公開と住民による協力の必要性について言及した。社会主義政策として政府が住民を指導していく体制は、日本と異なる社会構造であり、住民不在の保存手法を日本で考えることはできない。歴史地区の保存のビジョンを描くマスタープランは、保存地区の住民が主体的に考えていくものである。生きている遺産として歴史地区が守られていくためには、行政の補助体制だけではなく、住民による参加が不可欠である。日本がホイアンの保存に対して協力を行っていく過程で、行政の保存体制の確立に貢献したことは大きいですが、官民協力による歴史地区の保存にまで立ち入ることはなかった。文化遺産の国際協力において、ホイアンの保存事業の国際協力は、草の根レベルの保存協力の必要性を次世代の文化遺産国際協力事業に必要としていることを示唆している。

平成 25 年 9 月 14 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（世界遺産学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。